だりーなに惚れて

苦労する死人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイドルを姉に持つということ以外ほかの人と何ら変わりのない高校生とロックなアイドルを目指す高校生の甘く、甘く、とても甘い恋愛物語

※評価０、１を付ける場合理由を明記して下さると助かります

目次

1話目　姉貴が友人（親友？）を連れてきた ―― 1
2話目　あの娘のことが頭から離れない ―― 15
3話目　覚悟を決める ―― 28
4話目　君を想って ―― 46
5話目　鈍感 ―― 54
6話目　誘い文句は勝手に出てくる ―― 64
7話　デートで茶々が入るのは当たり前 ―― 71
8話　風邪を引いて看病されるのは当たり前 ―― 82
9話　幸せは日常に ―― 90

1話目　姉貴が友人（親友？）を連れてきた

３月１６日の放課後、３月１４日（ホワイトデー）とか言うお互いのお菓子の味の感想を言い合う日から２日経ってさらに学年末試験が終わった今ようやく俺は自由になれた、姉貴にもしっかりとお返しをしたから何の心配もない…筈。とりあえず今日はレポート仕上げなきゃ行けないから図書館に籠らねぇと、姉貴にもＬＩＮＥは送ってあるから問題ないだろ、どうせ出前頼むだろうし

「よお悠、今日これから暇か？」

「ん？何言ってんだよお前、レポート明日提出だろ？」

「は？お前こそ何言ってんだよ、レポート今週提出ないぞ？」

「はぁ？だって先週オリジナルクッキー作ったろ」

　あのクッキー実習は楽しかった…クラス２位勝ち取ったのもまた良かった

「だってあの時、あぁ、お前ら作りすぎてヘロヘロだったから聞いてなかったか？先生がレポートは提出しなくていいって」

「えマジかよ」

　……確かにあの時３時間弱で５品作ったからオーブンと作業台行ったり来たりして

たし
「うーん、悪い、金ねぇし付き合えねぇと思う」
「だろうな、その様子から財布持ってきてねぇだろ」
「悪い、埋め合わせはする」
「いいって、あの時クッキーをたらふく食わせてもらったし」
「ならその言葉に甘えさせてもらうわ、じゃあ先帰らせて貰うわ」
「おう、また明日」
「あぁ、また明日な、お前らも、お先」
『またなー（ねー）』
　さて、どうするべきかな、夕飯の材料は買って帰るとし姉貴に連絡入れるか否か
「あ、そう言えば近くのスーパー特売やってるじゃんとりあえず卵買って考えるか」
　連絡しなくてもいいか、抜き打ち家事能力チェックみたいな感じで部屋が片付いてるか分からないし。そうと決まれば帰るか。ダラダラしてる時間もそんなにないし

はぁ、なかなかレジ並んでたな、それに思ったより安かったから大量に買っちまった。

まぁ、いいか。どうせ保存がきくものを多めに買ったし生鮮食品だけさっさと使うとしますか。やっと着いた。ん？ギターの音が聞こえる。練習中だったか、まぁ重いから手伝って貰うが

「ただいま～、姉貴、居るんだろ、手伝ってくれ」

「ん？悠か、早すぎないか？」

「レポートが無かったんだ、ついでに買い物してきたから、荷物運んで」

「あぁ、わかった、悪いだりー、ちょっと待っててく…いや、ちょうどいいか、だりーこっちに来てくれ」

…ん？今人の名前が聞こえた気がするが、あの姉貴に限って家に人を招くなんてことをするはず

「わかった、なつきち。この人が弟さん？」

「そっ、木村悠、私の出来のいい弟だ」

……うっそぉ、姉貴がお客さん連れてきてる…しかもめっちゃくっちゃ可愛いし

「多田李衣菜です。なつきち…夏樹とは同じユニットで活動中のアイドルです。今日は夏樹にギターを教えてもらってました」

「なるほど、そういうこと。聞いてるみたいだけど改めて、俺は木村悠、木村夏樹の弟ってだけの単なる高校1年生です。これからも家を使う機会はありそうだし。よろしく

多田さん」
「よろしく。後同い年みたいだから李衣菜でいいよ。多田さんって言われるとムズ痒いし。こっちも悠って呼ぶしタメにするから」
　わ、わーお、おっそろしくフレンドリーだな。初対面の男に名前呼び許可するとか向こうも名前呼びとか。本人がいいって言うならいいけど俺が呼ぶのはなかなか不味い気がするんだよなぁ…さん付けしておこ
「わかった、よろしく李衣菜さん。ついでに姉貴の事もよろしくお願いする」
「おい、ついでってなんだついでって」
「じゃあ聞くけど姉貴、お菓子とお茶くらい出してあげたらどうだ？幾らアイドルやってて同じユニットメンバーだとしても親しき仲にも礼儀ありだ」
「うっ」
「それにこの様子だと家にはそこそこ招いてるだろ。李衣菜さん、姉貴からお茶とか出たことあるか？」
「え、えっと…そう言われると、で、でも頼んだら出るからいいかなぁって」
　一応李衣菜さんが頼んだら出すのか。流石に姉貴でも取りに行かせたりしないよな
「ふむ、姉貴、今回までは別にいいけどギターやってると汗かくだろ。お茶くらい先に出して置いたりとか塩分チャージとか出してやらないと。姉貴が倒れる分には家だから

俺がなんとかしてやれるが李衣菜さんが倒れた時どうする気だ？その間に誘拐されたりしたらどうする」
「ご、ごめん……」
「ゆ、悠もその辺に…」
……まぁ被害者がそういうなら、許してやるか
「あぁ、わかった。とりあえずこの話は終わり。さて姉貴。これ運んでくれないか？1人じゃ重くて」
「はいはい」
「わっ、こんなに買ったんだ…」
「姉貴も運んだら李衣菜さんに教えてあげな。俺は夕飯の支度しちゃうから」
「手伝わなくていいか？」
普段なら家事を出来るようになってもらうために手伝ってもらいたいところだが
「いい。それより李衣菜さんに教えてやれ。そのために来てるだろ？」
「悪い、サンキューな」
「いいって。後で試作品でよければベリーパイとお茶持っていくけど、2人とも要るか？」
「おっ、珍しいな。悠が試作品とはいえくれるなんて」

失礼な

「そういう気分だっての。李衣菜さんは要る?」

「あ、いら「遠慮しなくていいぞだりー、こいつのお菓子は1級品だから」…じゃあ貰おうかな」

「姉貴、ハードル上げないでくれよ。これでも見習いと同じようなもんだぞ?」

「何言ってんだか。この前シュークリーム持っていったらこいつらに好評だったからな」

「え!?」

「姉貴があれ持っていったのかよ、まぁ、別にいいけどさ、で、どうかした?李衣菜さん」

「いや、なつきちが持ってきたシュークリームって悠が作ったんだなって。てっきり買ってきたと思ってた」

　こんな可愛い娘に褒められるとかなにそれめっちゃ嬉しいだけど

「お、お世辞が上手だな。気に入ってくれたなら何よりだけど」

「お世辞じゃないんだけど…とりあえず貰ってもいい?」

「どうぞ、それじゃあとりあえず、姉貴。肉は冷蔵庫の下の段に、アイスは冷凍庫の取りやすいところ。野菜は野菜室に入れておいて」

「やれやれ、姉使いの荒いこと」

「なんか言った？明日の弁当のおかず1品減らしてもいいんだぜ？」
「なんでもない」
「…なつきち…」
「言うなだりー、これは仕方の無いことなんだ…」
「はいはい、それより洗濯物出した？出したなら回しちゃうけど」
「あっ、ちょっと待ってくれ」
　あれ、なんでだろう、李衣菜さんの姉貴を見る目が心做しかちょっと生暖かくなった気がするんだが
「なぁ李衣菜さん。姉貴って外じゃあんな感じじゃないのか？」
「勿論、なつきちはユニットとかだと私たちの意見をまとめてくれたりするリーダーみたいな感じ。けど家じゃ違うみたいだね」
「姉貴は昔から家事以外はある程度出来るんだけどなぁ、女子力はかなり低いと思う」
「あはは…私もそう思う」
　っと、戻ってきた
「出したから、回していいよ。んじゃだりー、やるぞ」
「うん、それじゃあ、また後で」
「あぁ、姉貴も李衣菜さんも後で」

　さて、そしたらさっさと洗濯物をしておくか。洗濯機回してっと、ベリーパイと…余ってたスコーンでも持ってくか、ジャムと生クリームを器に入れて、そしたら紅茶の方がいいよな、そしたらダージリンでも入れて行けばいいかな。茶葉あるよな?李衣菜さんには美味しいものを食べて飲んでほしいしなぁ…ってあれ?なんで俺李衣菜さんのことばっか考えてるんだろ。まぁいいや、さっさと紅茶を入れちまおう

「お疲れ様、間食にでも、どうぞ」
「嘘、すっごい美味しそう…」
「悪いな悠、って本当に珍しいなスコーンまでくれるのか」
「え?これも貰ってもいいの?」
「いいって、余ってたもんだし、ちょっと待ってな。紅茶も入れてやるから……なんだよ姉貴、いらないなら入れないぞ」
「い、いや。本当に今日は機嫌がいいんだなって思ってさ」
「全く、俺にもそういう気分くらいあるっての、失礼極まりないぞ」
「え?むしろ普段の方が気になるんだけど」
「そりゃもちろん鬼「言わんでよろしい」いてっ。いつもこんな感じだ」

李衣菜さんに余計なことを言わないで欲しいんだけど
「ぷっ、なつきちと悠って面白いね」
こんなもので笑ってもらえると嬉しいんだが、それよりも食べて欲しいなぁ
「とりあえずこの辺りにして、さぁ、食べてくれ、味には自信はないがって、姉貴はもう食ってるし」
「美味い、やっぱり悠が作るお菓子は美味しいな。だりーも食べな、美味しいから」
「それじゃあ、いただきます」
「まぁ感想は分かってるから聞かなくてもいいよな、悠」
「んなわけないだろ、貴重な女性の意見だ。聞くに決まってるだろ」
「…美味しい、本当に美味しい」
「そいつは良かった。作り手冥利に尽きるぜ」
「本当にこれ、私と同い年の男の子が作ったなんて信じられない…」
「だろ？」
「なにがだろ？だよ姉貴。割と何言われるか分からないからビクビクしてたんだぜ？」
「どうだか」
「まったく姉貴は。李衣菜さんもスコーンとベリーパイ、もっと食べていいよ。それじゃあ頑張れよ。姉貴も頼んだぜ？」

「あぁ、任せておけって」
「うん。またね」
つよし、喜んでもらえた。良かった良かった。さてと夕飯を作るとするか。明日も平日だし、姉貴の好きなハンバーグでも作って明日の弁当に入れるか
「お前は走り出す～なにかに追われるよう～」
やっぱり機嫌がいいと鼻歌でも歌いながら作りたくなるな
「俺が見えないのか～すぐそ～ばにいるのに～」

「さて、出来…」
何故だ、何故こんな多く作った俺！確かに使い切ろうとした、そこまではあってるし覚えてる。だがこの量はなんだ。姉貴の弁当用に取っておくとしても俺と姉貴じゃ3日はハンバーグだぞ。何かいい手はないか…
「あっ、李衣菜さん」
夕飯誘うか？多分姉貴も許可すると思うが李衣菜さん一人暮らしかそれとも実家ぐらしかで難易度が思いっきり変わるぞ。けど他に妙案も無いしな…しゃあないか

「姉貴、飯出来たぞ」
「ん、出来たか。今日の夕飯はなんだ？」
「ハンバーグ、けどその前に李衣菜さんって一人暮らし？」
「ん？一人暮らしだけど、どうしたの？」
「なら、夕飯、食ってかないか？作りすぎちまって」
「お？珍しいなお前が作りすぎるなんて」
「悪い、よく分からないけど多めに作ってたみたいだ。李衣菜さんさえ良ければ食べてってくれないか？うちを助けると思って」
「うーん、わかった。そしたらもらおうかな、料理も上手そうだし」
「本当か！助かる！2日連続ハンバーグは流石に飽きちまうからさ」
「そうか？私はいいと思うが」
「姉貴は黙って」

「さて、召し上がれ。っても大したもんじゃないけどな」
夕飯を人に出すなんて何年ぶりだろうか、今日も姉貴が好きな味付けにしちゃったし
『いただきます』

久しぶりに二人っきり以外で飯を食べるな。そして相変わらず姉貴は手をつけるのが早い
「うん、やっぱりハンバーグは美味しいな」
「う～ん、やっぱり美味しい！こんな美味しいハンバーグ初めて食べた！」
「う、サンキュー。美味しいって言われるのが1番嬉しいからな」
「なんだよ悠、照れてるのか？」
「あ、当たり前だろ！家族以外で初めて人に夕飯とか振舞ったんだから」
「って事は私が悠の1番客ってわけ？」
「ま、まぁそうなるな」
「やった！そしたらこれからも食べさせて貰おうかな～」
「別にいいと思うが、なぁ悠」
「なんで姉貴が許可を出すんだよ、まぁいいけどさ」
「やった、ありがとう！」
「またすぐ来るかもしれないしな」
「そうだね、これからはなつきちが悠に気を使わなくてもいい訳だし」
「まぁ、そうなるな。っとごちそうさま。皿は水に漬けとくな」
「あぁ、そのままでいいぜ。洗っておくから」

「あっ、私手伝うよ。ご馳走になりっぱなしだと、嫌だし」
「いやいや、お客さんに家事をやらせる訳にはいかないから。俺がやるよ」
「いいから、大丈夫、一人暮らしだから家事も出来るし」
　いや、姉貴みたいじゃないのは分かってるから家事能力の心配はしてないんだが
「なら、一緒にやろうか。それならいいんじゃないか？」
「まぁ、悠がそれでいいなら」
「決まりだな。じゃあ始めるか。姉貴はバイクの用意しとけよ」
「ん、わかった。けどどうしてだ？」
　……まさか姉貴
「もしかして姉貴、この時間まで李衣菜さん置いておいて1人で帰らせてたのか？アイドルやってる女子高生を」
「あっ」
　おいおい
「帰ってきたら正座な」
「…はい」
「悪いな李衣菜さん。さっさと洗い物をするか」
「う、うん」

「それじゃあ、そろそろ行くかだりー」
「うん、準備ＯＫだよなつきち」
「また何時でも来てくれて構わないぜ、俺がいる時なら何かしら出してやるから」
「そしたら今度も悠がいる時をなつきちにお願いしようかな。なんてね」
　さてと、お風呂掃除して入れておくか。姉貴が入る前に入っておきたいし
「よし、だりー。乗りな」
「分かってるって。あ、悠」
「ん?」
「今日、楽しかった、ありがとう!また今度!」
　……めっちゃいい笑顔。可愛いすぎだろあの人。あれはいいアイドルになれるな。あの笑顔が出せるなら
「はぁ～、次は事前連絡欲しいもんだ。お菓子も作っておかなきゃいけないし」
　けどまたすぐ会いたいな。李衣菜さんなら大歓迎だし

2話目　あの娘のことが頭から離れない

李衣菜さんが帰ったあと、風呂に入って、帰ってきた姉貴を正座させて1時間くらい説教してからご飯だけ炊いておいてから布団に入った。入ったはいいんだが

「寝れねぇ…」

なんでだ。理由が浮かばねぇ…いやまぁ、実際帰った後李衣菜さんにＬＩＮＥで友達になりたかったとか後悔してるけどもそれは大したことじゃないはず。どうせ姉貴の事だしすぐ呼ぶだろうしその時にでもお願いすればいいだろ俺

「あ～、李衣菜さん、今頃何してんだろ」

おかしい…このままだと明日の朝起きれず遅刻するぞ俺。姉貴にもニヤニヤしながらからかわれるぞ。羊でも数えて寝るのが普通だろ。そうだ、羊を数えればいいじゃないか

羊が1匹、羊が2匹、羊が3匹、羊が4匹、羊が5匹…

ん…あぁ、日が入ってきた…しかもご丁寧に顔に当たってきやがる。眩しい。まぁと

りあえず顔を洗うとするか
「あぁ～、寝みぃ…」
　顔洗ったら昨日の残りのハンバーグをあっためて、サラダとイチゴを弁当箱に詰めてそのあとご飯炊けるはずだから米を入れて。焼きベーコンとハンバーグ詰めて、姉貴起こして飯を食ったあと歯磨きやら着替えやらして登校していつも通りだ
「…うっしっ！やるか！」
　にしても寝てないにしては大分気分がいいな。なんでだろう

「ほら姉貴、起きろ、今日は仕事が午前から入ってるんだろ？」
「うーん…あぁ、おはよ、悠。飯は？」
「出来てる。その前に顔を洗ってこい。お湯が出るようにしてあるから」
「さんきゅー」
　フラフラとしてるが…まぁこんな姿、ファンには見せられねぇだろうなぁ…はぁ、しばらくは面倒見なきゃな
「よしっ！おはよう！悠」
「目が覚めたなら。さっさと食べよう姉貴。冷めたら美味しさも半減しちまう」
「あぁ、それじゃあ」

『いただきます』
「んむっ、そう言えば悠、弁当の用意って」
「終わってる。準備出来次第すぐ出れるよ」
「そうか。いつも悪いな。悠」
「いいって、元々そのつもりだったし……ふぁぁ」
「おっ、珍しいな。悠が食事中に欠伸するなんて」
「そうか？まぁ昨夜よく分からないけど眠れなかったからなぁ…はぁ」
「さらに珍しいな。なんか悩みでもあんのか？」
「いや？特にはないはずなんだが」
「そうか、ならいいけど。なんかあるなら相談しろよ？いじめでは無さそうだし」
「んなわけねぇだろ姉貴。あのクラスでいじめがあったら世も末だわ」
　いや、割とマジで3年間クラス一緒でいじめとかあったら死ぬ。真面目に終わるわ。
割り切れないなら来ない方がいい
「それもそうか。ごちそうさん、じゃあ先に出てるから」
「お粗末様。そしたら、お弁当をカウンターの上に置いておくから持って行ってな」
「あいよ」
「っし、そしたら洗い物も終わらせるとするか」

「んじゃあ。先に行くから、鍵は閉めてこいよ？姉貴」
「そのくらい、分かってるって。ほら、電車に遅れるぞ」
「分かってる。じゃあ行ってきます」
「おう、行ってらっしゃい」

「おはよ～」
「おう、悠、おはよう」
「おっす」
「おっ、朝からコンパスやってるじゃん。俺も入れてくれよ」
「いいぜ、この試合終わったらな」
「木村が入ると安定するから助かるよな」
「３：３のＰｖＰでリアルタイムで話しながらやれるんだからそりゃそうだ。お前らいつものだろ？」
「そういうお前はゴリカだろ？」
「まぁな…ふぁぁ」

アイドルねぇ…李衣菜さんみたいな人ばっかじゃないしな
「おいおい、この時間に欠伸するなんてこのあとの授業大丈夫か？」
「まぁ、なるようになるさ。どうせ今日も昼前には帰れるし」
「あぁ～、負けたァ～、じゃあ行こうぜ。上な？」
「わかった」

「…はぁ…」
今日は変だな。やけにため息が止まらない…なんでだ？
「…ねぇねぇ、木村君」
「はぁ…ん？なんだ？」
「今日やけにため息多いけど大丈夫？」
「大丈夫大丈夫。それより黙っとこうぜ。先生に目をつけられたくない」
「それもそうね。けど何かあったらみんなに相談しておけば？」
「そうさせてもらうわ」

「よぉ、木村。今日は顔に疲れが出てるぜ？」

「うっせぇ、こっちとら寝てねぇんだっての」
「おいおい、それはダメだろ。次の授業自習らしいし、寝ておけよ」
「うそっ、次の自習なのか？」
全然聞いてなかったぞ。あの先生雑すぎんだろ
「さっき先生たちが話してたのを立ち聞きしたのさ。ってなわけだ。寝ておけ」
まじかぁ、助かる
「了解しましたっ！」
「敬礼すなっ」
李衣菜さん、何してんだろなぁ

「それじゃあ級長、号令」
「起立、気をつけ、礼」
『さよなら!!』
「おい、悠！今日の夜、暇なら電話しようぜ」
「ばーかお前、学生主夫にそんな暇ないって」
「おうおう、誰が学生主夫だって？あん？」

誰が姉貴の主夫になるか。なるなら李衣菜さんみたいなちゃんとした人がいいなぁ…ってなんでここで李衣菜さんが出るんだ？

「でも、通話できねぇんだろ？」

「まぁな、明後日、金曜日の夜なら問題ないぜ」

「マジか、ならその日にしようぜ」

「了解。じゃあお先に帰るわ。また明日」

「おう。またな」

さてと、今日はお客さんは来ないだろうし明日の弁当のおかずもまだ残り物があるはずだから…うどんにでもしようかな

「ただいま～」

ん？まだ姉貴は帰ってきてねぇか。ＬＩＮＥはっと、何もなし

『夕飯はいりますか。何時に帰ってきますか』っと」

……既読早っ『飯いる、八時前には帰る』ってことは自主トレか。大変なんだなぁ、アイドルって、まぁそれはいいか。そしたらどうするか…洗濯物は明日でいいか？たいした量ないし。さっさと風呂洗っておこう。そしたらどうするか…うどんだからたいして手間もかからないし…そうだな。そんなことで甘えてはいけないな。掃除でもする

か

「あれ？掃除機どこにしまったっけか」

いつもの場所にない…姉貴か、となると部屋にあるな

「ったく、あの人は、なんで元の場所に戻せないかな」

っし、あったあった

「そしたらやりますかね…ん？これは」

【だりーに教える事！】ギターのやつか。ってかなり初級だな。俺も姉貴ほど上手くないから人並み程度だがこの位なら…

「俺でも教えられるかなぁ……いやいや、無理だろ。バンドとかの話とかもできねぇのに…はぁ、何考えてんだ俺は」

姉貴からＣＤとかは誕生日にプレゼントされてるから曲は知ってるけどバンドまでは知らないからな…

「んなことより。今は掃除だ掃除！」

いつお客さんが来ても構わないようにしておかなきゃな…

「ただいま」

「お、おかえり、姉貴。今夜はうどんだ」

「お、やったね。けど先に風呂って」
「沸かしてる。もう少しでうどん茹で終わるから先に入っててていいよ」
「サンキュー、いつもナイスタイミングだよ」
「そりゃ、家族だからな。何となく分かるさ」
「そっか、それじゃあ遠慮なく一番風呂いただくな」
「はいはい」

「風呂空いたぞ～」
「了解～。姉貴、箸出して、俺盛り付けやっておくから。間違っても3つ出すなよ？」
「いくら私でもんなことしないって」
…確かに、なんでそんなことを聞いたんだ俺は。アホか
「悪い悪い、ちょっとな」
「まぁ、明日は箸を3つ出すことになると思うけどな」
…はい？
「……え？どうしてさ」
「どうしてって、明日まただりーを呼ぶからだよ」

ふむ、また李衣菜さんを家に…ねぇ
「なぁ姉貴」
「うむ、なんだ弟よ、そんな俯いて」
「どうしてそういうことを知らせないんだ。お菓子も何も作ってないんだぞ。お客さんを招く時は少なくとも夕方には連絡しろよ。対応出来ないだろ」
「…はい、おっしゃる通りです」
「でも来ることに変わりないからもう言わない、とりあえず今あるもので適当に作るからな」
「え？今から作るのか？」
「いや、何もなしはないだろ。マドレーヌとシフォンケーキ程度なら作ってやる」
李衣菜さんが来るのに何も用意しないのはな
「そうか、悪い、今度からちゃんと伝える」
「そうしてくれよ。そしたらもう少し手の込んだものも作ってやるから」
「…悩み事は解決したみたいだな。偉く上機嫌じゃないか」
は？
「どこかだよ姉貴」
「どこって、悠、お前、笑ってるぞ」

「え？ほんとだ」
　言われるまで気が付かなかった…なんで笑ってるんだ？
「ま、いいけどな。だりーに伝えて置くわ」
「サンキューな姉貴……あ、うどん」
　やらかした…話に夢中になり過ぎてた
「ん、多少のびてるけど美味いぞ？」
「悪い、俺の責任だな。さっさと食べよう。いただきます」
「そうだな。いただきます」

「ごちそうさまでした」
「はいはい、お粗末様」
「それじゃあ皿は水につけておいてくれ、俺は風呂はいってくる」
「ん、わかったそれじゃあ私は歯を磨いて先に寝るよ。明日少し早いから」
「了解、じゃあ俺も早く起きなきゃな」
「無理しなくていいぞ、買っていけばいいし」
「俺が来る前そうやって生活してたんだから栄養バランス考えろ、それに一人分っての

はめんどくさいし」
　その方がお金も節約出来るから、なんて口が裂けても言えないし
「そしたら、頼もうかな。よろしく頼むよ」
「任せとけ、それじゃあおやすみ、姉貴」
「あぁ、おやすみ」

　さてっと、とりあえず風呂上がったらシフォンケーキ焼いて冷ましておいてかなきゃな、やっぱりガスオーブン家から持ってきてよかった。楽できるしな
　それになんだか今日はよく寝れそうだ。理由はよく分からないけども、李衣菜さんのお陰か……ってまて、なんで今日一日中李衣菜さんの事を考えてる俺、おかしいよな、絶対。ちょっと友人にＬＩＮＥしておこう
【一日中異性のことを考えてるのってどうなんだろうな】
　既読はや、返信もはやいな
【それ十中八九惚れてるだろ、そいつ】
【どうしてそう思う？】
【そりゃ、惚れてる人じゃなきゃ一日中も考えるわけねぇじゃん】

【それもほうか、じゃあ寝るわ】
【おう、おやすみ】

…嘘だ！俺がこんな一目惚れとかするなんて、そんなバカことあるか！そうだよ！李衣菜さんが知らない男の人と手を繋いでても何とも…おもわ…思うな、むしろ胸が痛くなるし李衣菜さんと話してみたくなる。
「…あ、やばい」
ちょっと待て、明日どんな顔で李衣菜さんの前にどんな顔して会えばいいんだよ!!平常通りなんて出来るわけねぇだろ！あんな可愛い女の子の前で！しかもこれは姉貴を頼れるわけねぇし！根掘り葉掘り聞かれそうだし…ぁぁ…前途多難だな…

３話目　覚悟を決める

ふむ、今日はしっかりと眠れたな。昨夜ギリギリまでシフォンケーキを本気で作ってたから疲れたか。しかもそれでいて大事な起きる時間を早めるということも出来た
「パーフェクトだ俺…」
よし、そんじゃさっさと弁当のおかずを用意するか、今日は割とハードっぽいしササッと食べれるサンドウィッチにでもするかな
「よしっ！今日はいつもより気合入れていくか！」
「なんでいつもより気合を入れるんだ？」
「ぴゃっ!?あ、姉貴か…びっくりさせないでくれよ」
「悪い悪い、最近お前がかなり変わってるからさ」
「む、そう見えるか？」
「そりゃな、ちょっとどころじゃないな」
姉貴に勘づかれるのか、結構重症だしわかりやすいのかもな俺。クラスメイト達にバレようものならどこまで広まるか分かったもんじゃないし
「まぁな、色々あんのさ、男子高校生にはさ。それより姉貴。今日の弁当はサンドウィッ

チとスープだから妙な時間に食ったりしないでくれよ？腹が持たなくなるかもしんねぇし」
「わかった。まぁそんなことないと思うけど」
「姉貴腹持ちいいからなぁ。羨ましいよ」
　ほんと、すぐお腹減るから食い物常備しないと行けないのが辛いよ
「まぁ、私からしたら食っても食っても減ってくお前の方が羨ましいよっと」
「お互いないものねだりして仕方ないな。じゃあ食おうぜ。パンは焼けてるから好きにして食ってくれよっと。いただきまーす」
「ん、いただきます」
　うん、食パンもバターを使った方が美味しいよなぁ。今度作ってみようかな。材料は用意しやすいしな。人にあげるのに妙な気を使わなくて済むし

「っし、ごちそうさま。それじゃあそろそろ出るな」
「お粗末様。ん、わかった。歯磨きセット忘れるなよ。後、今日の夕飯は豪華にしてやるから李衣菜さんと一緒に遅れないように」
　まぁ、多少見栄を張ってもいいよな…？お小遣いも全然使ってないし

「おっ、そりゃ楽しみだな、わかった。遅れないようにしておくよ。いってきまーす」
「おう、いってらっしゃい～。さてと、ぼちぼち俺も準備しますかね」
朝が大して忙しくならないのが救いだな。ゆっくり準備できる

「おっす、おはよう」
「おう、悠。おはようさん」
「おーう、おはよう」
始業八時半からなのになんで八時でもう着いてるんだよこいつら。暇なのか
「にしても悠、昨日のＬＩＮＥはなんだ？妙な事を聞きやがって」
不味い、ココでその話をされるとモロバレる、誤魔化しかない。どうやって
「あ、あぁあれ？ちょっと姉貴から相談を受けてな。恋愛に疎い俺じゃよ、よくわかんなかったからさ」
「ふーん、姉と二人暮しってのも大変そうだな。主夫してるし」
誰が主夫だと言いたいが話を反らせるのなら何だっていい、いいから
「そりゃな、基本的なものは全部俺だからなぁ、かなりハードだぜ？」
「お疲れ様、その年でいい苦労してるよなお前」

「こんな苦労するんだからそれなりにいい思いしたいぜ全く」
…まぁ李衣菜さんに会えるようになったと考えれば天元突破していい思いなんだけども
「でもお前ほんと不思議なくらい色恋沙汰の話聞かねぇよな。もしかして枯れてるのか？」
「ははは っ、ぶち〇すぞ」
「おう、某ネズミのモノマネやめーや」
「是非もないよな？当たり前だろ？」
「はいはい、そこまでにしとけよ。そろそろ体育館行くぞ。よくわからない話を聞かされるから」
あぁ、この先の話か。あいにく俺はオヤジから就職、進学ＮＯって言われてるしなぁ…姉貴の面倒みさせ続ける気かよ
「あぁ～めんどくさい。どうせ俺しばらく働けねぇけど」
「…あぁ、そういえばお姉さんの面倒をしばらく見続けなきゃいけないんだっけ？ご愁傷様。一応お金とかは貰えるとはいえ、実質専業主夫だろ？」
「ぶっ、木村が専業主夫とか似合いすぎだろ」
「あ”あ”ん？」

「悪い、悪い、悪かったって、そんなに睨むな」
「ったく、何を言うかと思えば。オラ。さっさといって寝ちまおうぜ。俺は今日は帰宅してから忙しくなるから今のうちに休息を取りたい」
「おっ、また家事か？」
「そうだよ。姉貴の友人が来るから御出迎え」
「ふーん、可愛いの？」
「…まぁ可愛い」
　あんまりこいつらに李衣菜さんのこと教えたくないな…嫉妬深いなぁ俺も
「なら役得だろ？頑張れよ」
「おう、頑張ることにしてる」
　むしろ適当なことで済ませるなんて俺が許さない
「それじゃあ行こうぜ」
「あいよ」
「だな」

「やっと帰りのホームルームかよ。長ぇなぁ」

早いところ夕飯の食材買いにいきたい
「んなこと言うなって普段はもっと伸びんだからよ」
「そうそう。諦めておきなって」
「んなこと言われてもさ」
「ほら、先生来たからこれでもう帰れるぜ」
「はぁ、今日のタイムセールは何が売ってたっけなぁ」
「気にするところがおかしいだろお前それ」
「うっせぇ、料理は豪華に作るが素材まで全部豪華にしてみろ。家の家計が火の車だ」
後、いつかこの時の家計簿見直して自分が蒼白にならないためでもあるけど
「本気で大変そうだな。お疲れ様」
「まぁなけど楽しくもあるし俺が好きでやってることだしな」
それにこれやってたおかげでいい顔も出来るしな

さて、今日は豪華にすると言った手前すき焼きにでもするか。とりあえず牛肉と春菊、しらたきに白菜、豆腐だな。李衣菜さんが肉好きか分からないのが難点だったけどよく思い出せばこの前のハンバーグ食ってたんだから行けるんだろう
「そうと決まれば楽だな。明日は休みだからおかずは考えなくていいし」

今日の目標はＬＩＮＥの友達交換、それ以上は望むべきではないな。昔から二兎追うものは一兎も得ずと相場が決まってるしな。っと、生クリームを買い忘れるところだった。デザートがしょぼくなる

「まぁ気になるあの娘の笑顔のために頑張りますって、くさすぎるかな」

けど嫌いじゃないけどな。まっすぐで綺麗でわかりやすい

「さてと、家に帰ったら鍋を洗い直さなきゃな」

「ただいまー、って誰もいねぇし、さっさと準備しちまうか」

すき焼きだけだと偏るしさらに軽いサラダも用意しておくとするか。お米も炊いて、汁物は要らないとして、飲み物は麦茶かな

「あっ、姉貴に何時に帰ってくるのか聞いてねぇ」

かなりうっかりしてた。まぁ今から聞けば問題は無いよな？『何時くらいに帰れる？』っと

「こうなると野菜とかの下準備くらいしか出来なくなったな…お米をといでなくてよかった」

あっ、既読ついた、姉貴って以外に暇なのか？結構早いし…まぁいいか、準備しやす

いし。おっ、返信来た来た『7時36分の電車乗るから逆算任せた』雑か、雑だな。えっと駅からまぁ徒歩で10分程度だからまぁ7時50分程度だろ。話しながら来るだろうし多少遅くなると考えていいだろ

「そうと決まればお米も炊いていいし時間見てすき焼きも完成させておくとするか」

やっぱり、こういうことは楽しいな。特別な他人に作ろうとするのは初めてだけどこれもいいな

「よしっ、準備完了！生クリームもしっかり8分立てにした！問題なし!!」

あとは姉貴と李衣菜さんが来るのを待つだけだな。ふっ、我ながらよく出来たと褒めてやりたいところだな……つか、よくよく考えたらこれ暗喩のレベルで李衣菜さんに惚れてますって言ってるようなもんだよな…？

「ちょっとまって、ばれるのむり、どうすればよいの、たすけて」

だってぜってぇ姉貴が何かしらポロって言っちまうだろこれ！しかも普通の女の子なら気がつくって！名探偵とか孫とか要らないレベルだってこれ！

「あうあうあうぅぅ」

「ただいま、悠」

「お邪魔しまーす」
「ひゃぁっ！」
　なんでこのタイミングなんだよ！無理無理無理！無理だって！今李衣菜さんと目と目を合わせられねぇって!!
「お、おう、いらっしゃいませ」
「う、うん？って悠、大丈夫？顔すごい赤いけど、熱でもあるの？」
　あるよっ！あなたのおかげでぶっ倒れそうだよ！なんて言えないでしょうが
「ま、まさか、熱なんてあったらここに立ってねぇよ。あははは…」
「絶対あるって、ほら、おでこ貸して」
「え？」
　……わぁー、りいなさんのかおがこんなにちかくに、いい匂いするー
「え、ちょ、ま、わ、」
「ほら、こんな熱い。ねぇなつきち、悠、熱あると思わない？」

　なるほど、なんで弟(悠)がこんなに頑張ってるのかわかった。だりーがうちに来るまでは半信半疑だったけど帰った時のあの狼狽えようと目を合わせないで顔を赤くしてるの

と、さっきのあの反応で確信をを持てた。こいつ、だりーに惚れてるな。それもベタ惚れ。対するだりーは鈍感も鈍感。こりゃ苦労しそうだな、悠
「なつきち、悠、熱あると思わない？」
「いや？朝はとっても上機嫌だったし元気そうだろ？今も」
「そ、そうだな、めっちゃ元気だぜ？李衣菜さん」
「本当かな？」
「ほほほ本当に！」
　うわぁ…あそこまで顔近づけられるとかそりゃ顔も赤くなるわ
「ほら、だりーも、悠が大丈夫って言うなら大丈夫なんだから。飯を食おうぜ」
「うーん…必ず気分が悪くなったら休むこと、そんな無理して頑張られてもこっちが困るし」
「い、ＹＥＳ、ＭＡＭ」
「よろしい、なんてね」
　おっと、悠にはちょっと話があんだよ
「なぁ悠」
「な、なんだよ姉貴」
「大変な相手に惚れたな」

「なぁっ!?」
　おーおー、いい反応してくれるな
「ちょっと後で話があるからな?」
「…了解」
　しっかり姉貴が面倒見てやるから、しっかり成就するんだぞ? 我が弟よ

「ちょっと後で話があるからな?」
　ぁぁぁぁぁぁ!! 絶対バレたぁ!! めっちゃニヤニヤしてやがるぅ! 姉貴にだからまだ首の皮一枚繋がってるけどその1枚もカミソリでスッって切れ込み入れられてるって!! 不味い不味い!!
「……了解」
　諦めろ俺、終わった、色々と終わった
「さて、食うか、だりー、夕飯何か分かるか?」
「ん、見たほうが早いよなつきち」
「お、すき焼きかぁ、本気で豪華にしたんだな」
「当たり前だろ? ココで嘘ついてどうするんだよ」

「それもそうだな、嘘つくような男に見られたくないもんなぁ」
　やめて、殺して、いっそひと思いに
「？何言ってるのなつきち、ほらご飯よそうから運んで」
「あぁ、わかった。ほら悠も手伝う」
「お、おう」
　…あれ？李衣菜さん気がついてない…？いやいや、姉貴で気がつくんだし…余程の鈍感じゃなきゃ……
「にしてもすごいじゃん。今日なんかの記念日？」
「いや、特になんともない平日だよな？悠」
「あ、あぁそうだな。姉貴」
「へぇ、そうなんだ。そしたらどうしてこんなに豪華なの？」
「貴女の為です」
「え？」
「い、いや別に、なんとなくそういう気分だったってだけさ」
「ふ～ん、まぁ時々そういう日はあるもんね」
「そうそう、あははは…」
　やめろ、姉貴、そんな睨むな、ヘタレなんだよ。睨まれても困るって

「それじゃあ食おうぜ」
「そうだね。せっかく悠が作ってくれたんだし」
「そうだな。じゃあいただきます」
「いただきます」
「はいどうぞ。そして俺もいただきます」
　うむ、味付けは薄味にしてみたが悪くないな。タレの量は固定だな。後でメモっておこう
「すき焼きなんて久しぶりだよ。なつきちは？」
「私も、実家で食べたのが最後だ。全く、だりーには感謝だな」
「え？私？なんで？」
　このっ！バカ姉貴が！早速何やらかしてくれてんだよっ!!
「ん？まぁ色々あるのさ。こっちにもな」
「ふーん、変ななつきち」
「なんで今ので気が付かない…？全然変じゃないよな？悠」
「ソウダネー、イツモノアネキダネー」
「こいつ…」
「あははは、相変わらず面白いね」

「俺は漫才師を目指しているわけじゃないんだけどなぁ」
「そんなこと私だってそうだって」
「けど、私は好きだよ。こういうのは」
っっっっっ!!
「ずるいな全く…そう言って貰えると報われるのかな？」
「はぁ…チョロい」
「るっせぇ」
文句あるならおかず減らしてやるぞ
「…っ!?」
「どうかしたなつきち」
「分からない。けど急に寒気が……」
勘のいい姉貴だこと
「気のせいだろ？むしろ姉貴の方が風邪引いてるんじゃないか？」
「まさか、全然元気だって」
「そうそう、なつきちは風邪ひかないでしょ。お世話する人が居るんだから」
「ちょっ、それはどういう事だよだりー」
「そのまんまの意味だよなつきち。悠が居るのに体調崩すなんて基本ありえないじゃ

ん」
「まぁ、さすがにアイドルのお仕事を休ませるわけにはいかないからな」
　気を使わざる得ないってもんよ
「相変わらず過保護だなぁ…親父にそっくりだ」
「そこ、俺いなかったらこの家どうなってたか分からないだろ」
「そんなわけないだろ。これでも1年は暮らせたんだぞ」
「いや、むしろ1年超えたらどうなるか分からないんじゃ…」
「さすが姉貴とは違う一人暮らしをする李衣菜さん。言いたいことを言ってくれる」
「…それより、悠、デザートあるんだろ。食べようぜ。すき焼きも食べ終わったし」
　逸らしたな…まぁいいか
「はいはい、ちょっと待ってろ。シフォンケーキ持ってくるから」
「昨日の夜頑張って作ってたもんな？悠」
「うるせぇぞ姉貴。ケーキやらねぇぞ」
　……にしてもこんな会話してても平然としているのは気がついてるってわけじゃないんだろうな。李衣菜さん、気がついたら慌てそうだし
「とか言いながらちゃんと切ってきてくるんだね」
「そりゃ、勿体無いし」

「ふふっ、やっぱり優しいね、悠は」
っっっっっ!!
「…そうか？」
「何この異性キラー」
「と、とりあえず、ほら、生クリーム付けて食え」
「あれ？また悠顔赤いけど、大丈夫？」
「大丈夫!!大丈夫!!だから」
これ以上は体もたないから!!

「ただいま、悠」
「ふぅっ、おかえり姉貴。李衣菜さん。ちゃんと送ってきたか？」
「そりゃな、で、お前どうする？」
「どうするって。何をさ」
「確かにだりーは良いと思う。家事も出来て優しくてオマケに同性の私から見ても可愛い。お前がベタ惚れになっても仕方ないと思う」
「う、うん」
なんか、いつもより姉貴が真剣な目だ

「けど、お前、アイドルに恋をするって、その意味分かるよな？」
「っ…分かってるさ。もしかしたら…いや、もしかしなくても叶わない恋だと思ってる。もっとイケメンや高収入の男の人が沢山居るし」
「……え？いや、アイドル恋愛厳禁…」
「ん？んなもん調べたに決まってるだろ？姉貴の事務所は恋愛自由、どこにもダメって書いてなかったぞ。少なくともホームページと姉貴の時の契約書には」
　そんな抜かりあってたまるかっての
「……本気だな？本気でだりーを恋人にしたいか？それでだりーのアイドル人生に傷をつけても？」
「半端な覚悟であいつと付き合おうっていうなら私は止める。身分相応の恋をしてほしいからな」
「その覚悟がお前にあるか？木村悠」
　……ったく、優しすぎるぜ、夏ねぇ
「当たり前だ、俺は、絶対に、李衣菜を世界で1番幸せにして見せる。そこまでにどんな障害があろうが、絶対に守ってみせる。惚れた女1人口説けないで、男が務まるかよ！」
「ふっ、よく言った悠、それでこそ私の弟だ」
「うわっ、いきなり撫でるなよ姉貴」

「おっと、つい昔のくせでな。それより頑張れよ悠。私も応援してるぜ」
「サンキュー姉貴、助かるよ」
「その代わり必ず、だりーを幸せにしろよ?」
「もちのろんさ」
　さて、姉貴の協力も得られた事だし…これからも頑張っていけそうだな
「とりあえず明後日も連れてくるからな」
「は!?」

４話目　君を想って

あれから、姉貴の協力（？）のおかげで李衣菜さんを家に招く機会が大幅に増えた。それで気が付かれるかとも思ったけど、全くそんなことはなかった。嬉しいって言えば嬉しいけど、少し悲しかったり。あとは姉貴のお節介でそこそこ李衣菜さんのことが分かってきた

「だりーってさ、彼氏とか欲しくないのか？」
「うん？別に今まで考えたことなかったかな。今はちょっとわからない」
「ふ、ふーん、年頃なんだし考えてもいいと思うけど」

「だりーはさ、好きな男のタイプとかあるのか？」
「うーん、安置だけど優しくて一途な人かな、浮気とかロックじゃないとかそれ以前の問題だし。でもいきなりどうしたの？」
「いや、もしかしたらテレビで聞かれるかもしれないだろ？」

「そんな質問されたら困るけど」

「そう言えばだりーは学校でモテたりするんだろ？」
「あはは、そんなわけないじゃん、なつきち。至って普通だよ。男子のほうが話しかけに来るのは多いし、呼び出しくらうけど仕事や練習が重なることが多くていつも断ってる」
　それって牽制しあってたり告白しようとしてるんじゃ……ご愁傷様
「そ、そうか、案外普通なんだな」

「李衣菜さんってさ、好きなお菓子とかあるか？」
「んー、今のところは悠の作るお菓子ならなんでもいいかな～、どれも美味しいし」
　はぁぁぁぁぁ…これで単に友達気分なのが辛いところだ
「それはそれは、パティシエ冥利に尽きるぜ。そしたら料理はどうだ？」
「料理の方も特にはないかな、悠が作るの全部好みだし。どれも美味しいし。あ、けど私、ミント好きじゃないんだよね…あはは…」
　ミント嫌いっと、メモメモ

　こんな感じの1週間を過ごしてようやく明日から春休みでそろそろ寝ようとしたら姉貴に呼ばれていきなり
「結論、だりーは鈍感」
「分かってるっての、実体験したわ」
「知ってるし見てたけどな、ことごとくお前のことを暗喩で出したりとかしてみたけど気がついてないし」
「しかも気が無いのかなと思わせておいて思わせぶりなことをいうな」
　本当、心臓に悪いったらありゃしねぇよあれは
「お疲れさま、全く大変な奴に惚れたなお前も」
「分かってるってけど、惚れちまったもんは仕方ないさ。それよりも今を考えなきゃ」
「まぁ確かにな、このまま情報収集ばっかりやってもダメだろうな」
「それでさ、姉貴、この春休みの間にさ、デートでも誘ってみようかなって思うんだけど」
「いいじゃねぇか、でもそのプランはどうするんだ？」
「それは、4月にロックバンドのフェスあるだろ？そこのチケット取って行こうかなって」
「それはいいがそれまでの時間はどうする」
「近くに広い公園もあるみたいだしそこを散歩しながら弁当でも食べようかなっては考

えてる」
「店で食べないんだな…」
「食べてもいいんだけどまぁ、李衣菜さんが俺の料理が好きって言ってくれたんだし。頑張って作ろうかなって」
「お前の頑張るは本当にお店みたいだからな。下手な店に行くよりずっといいよな」
「後はゲームセンターにでも行ったりしてみようかなって」
「ほお、なかなか考えてるんだな」
「いや、多分このルート、定番なのか怪しいところだからな？」
「そうなのか？いいと思うが」
「初デートで公園ってのも、すごいと思われがちらしいが…まぁ所詮人の意見だしな」
「そうそう、自分がいいと思ったらそれでいいのさ」
「だよな、でさ、明日から春休みなんだが、姉貴は実家に帰るのか？」
「いや、私は小刻みに仕事が入っちゃったから電話だけしておこうかなって考えてる、お前も戻る気はないんだろ？」
「当たり前だろ？なんで自分で厄介事しかない街に戻るんだよ」
「相変わらず毛嫌いしてるな、まぁ戻らないのは賛成だけどな」
「んだよ。とりあえず今度来た時にでも誘ってみるわ」

「まっ、それがいい。多分次来るのは三日後位だけどな。仕事の都合が合わないし」
「むしろ、そんなに来て、李衣菜さん休めてるのか？ムリさせたくはないんだが」
「あぁ、その点は大丈夫だと思うがな。何なら次来る時、家に泊めさせるか？」
　李衣菜さんとひとつ屋根の下…
「一緒に朝ごはん食べたり…いっそ手を繋ぐ位は…」
　わ、悪くないな
「おーい、かえってこーい」
　はっ!?
「あ、あれ？」
「おかえり。で、どうする？」
「よくよく考えたら客用の布団がないじゃん」
「そんなの私と一緒でいいんじゃないか？」
「確かに…」
　行ける、行けるな
「なーんてな、流石に呼んだりはしないさ。だりーも疑問に思うだろうしな」
「そ、そうだよな。そりゃそうさ」
「なんだ？呼んで欲しかったのか？」

「まさかそんなわけないだろ」
「ははっ、わかりやすいな悠は。大丈夫さ、もう少し進んでから呼んでやるから」
なんだよ。勝手に人の心読みやがって…まぁありがたいけども
「それよりも、どうやってだりーを誘うんだよ。流石にバレる可能性高いと思うが？」
「ん？偶然手に入ったことを装えばなんとかなるって。李衣菜さん、気がつかないだろうし……」
本当、なんで気が付かないだろ
「自分で言っててダメージ受けるなよ…まぁ分かるけどさ」
「とりあえず三日後だろ？どんなお菓子作ろうかな。結構直接的だけど気が付きにくいマカロンとか」
「なんだそれ。花言葉みたいなのがあるのか？」
「いや、本来ならホワイトデーのお返しに贈るのが普通なんだが。たかが友人程度にマカロンなんて贈らないから割と通じやすい……はず」
いや、十中八九通じないだろうけども…やらないよりやって砕けなきゃ
「相変わらず…」
「まぁ姉貴でも知らないってことは李衣菜さんも知らないだろうけどさ」
「まぁ、まずホワイトデーのお返しにそんな意味があるなんて知らなかったよ」

「だよなぁ、確かに贈り物だもんな、姉貴が気にするわけないか」
「お前、割とひどいこと言うよな」
　そうかな、大したことは言ってないと思うんだけど
「そうか？普通だろ？」
「…もう少しオブラートに包んだらどうだ？」
「…善処するわ」
「とりあえずそれはそれとして。いいんじゃないか？マカロン、色んな色も作ればいいし」
「見た目は大切だからな。第一印象が全てではないけど美味そうに越したことはないし、綺麗なことも大切だ」
「そうだな、後は味もだけど、その点は大丈夫だろ？」
「もちろん。俺がその辺はミスする訳にはいかないのはわかってるだろ？」
「だよな、なら今後の予定を確認しておくか」
「つっても三日後に俺が李衣菜さんをデートにお誘いすればいいんだろ？」
「おいおい、簡単に言ってるけど」
　まぁ、そりゃ向こうはデートとは思わないだろうしな
「わかってるさ、けどまぁ、何事も当たって突っ込むんだぜ」

じゃなきゃらしくないだろうし。何より何もしないよりずっと楽だ
「はぁ、我が弟ながら単純だな」
「姉貴だってそうなんだから変わらねぇよ」
「私はそこまで単純じゃない気がするけどな」
「……まぁそう思うならそれでいいや。とりあえずマカロン何味にするか考えておくよ」
「そうしておくほうがいいな。まぁだりーならミント以外なら基本食べそうだけど」
「そっか、ならある程度絞れそうだな」
「あぁ、失敗しなさそうだけど、一応失敗だけはするなよ？」
「わかってるさ、間違えたりなんてしねぇよ」
「ならよかった、それじゃあ、私明日も仕事だし、そろそろ寝るよ」
「サンキュー、助かったよ姉貴」
「気にするなって、私も姉としてお前の恋は応援したいしな」
…ほんと、いい姉を持ったよ俺は
「おやすみ、悠」
「おやすみ、姉貴」
とりあえず三日後、ちゃんと誘えるか、そこだけだな

5話目　鈍感

3月16日、プロデューサーさんにホワイトデーのお返しを貰って2日後、やっと終わったレッスンの後なつきちに呼ばれたから行ってみると今日は練習場を取れなかったらしい

「今日の練習はなつきちの家？」

「あぁ、悪いな」

「ううん、全然、むしろこっちがお願いしてるんだし。けど毎度の事ながら大丈夫？弟は学生なんでしょ？」

「あぁ、気にしなくていい、あいつ今日は遅いって言ってたし」

「じゃあ遠慮なくおじゃまさせてもらうよ。気を使わなくていいし」

「おっ、言ったなだりー。今日はいつもよりハードにしてやろうか？」

「げっ、それは勘弁して欲しいな」

「ははは、冗談だ。さて、行くぞ」

「うん」

電車で移動して既に暗記した駅からなつきちの道を通って行けば先にバイクで帰ってたなつきちの姿が見える
「おじゃましまーす」
「いらっしゃい、つっても何度目か分からないけど。お茶入れてくるから、私の部屋で待ってろ」
「うん、分かった」
やっぱり、なつきちの部屋って整理整頓されてるなぁ、どこに何があるのかわかりやすいし
「さてっと、用意は出来たな」
「うんうん、もちろん」
準備を怠るなんてことはしないし
「うっし、やるか!!」
「うん!!」

「ただいま〜、姉貴、居るんだろ、手伝ってくれ」
あれ?誰か帰ってきた?
「ん?悠か、早すぎないか?」

この反応的になつきちの弟かな?彼氏とかにしてはなんか違う気がするし
「レポートが無かったんだ、ついでに買い物もしてきたから、荷物運んで」
「あぁ、分かった、悪いなだりー、ちょっと待っててく…いや、ちょうどいいか、だりーこっちに来てくれ」
さてと、なつきち自慢の弟の顔を見てみようかな……ふむ、さすがなつきちの弟、似てる
「分かった、なつきち。この人が弟さん?」
「そっ、木村悠、私の出来のいい弟だ」
……やっぱりなつきちってブラコンだよね…っと自己紹介自己紹介、向こうは唖然としてるけどなんでだろ
「多田李衣菜です。なつきち…夏樹とは同じユニットで活動中のアイドルです。今日はなつきちにギターを教えて貰ってました」
あ、正気に戻った
「なるほど、そういうこと。聞いてるみたいだけど改めて。俺は木村悠、木村夏樹の弟ってだけの高校1年生です。これからも家を使う機会は多そうだし、よろしく多田さん」
堅苦しく接されるのはロックじゃないし、何となく同い年には名前で呼んでほしいし
「よろしく。後同い年みたいだし李衣菜でいいよ。多田さんって言われるとムズ痒い

し。こっちも悠って呼ぶしタメにするから」
　あ、あれ？なんか驚いてるけど、なんか、変なことしたかな
「分かった。よろしく李衣菜さん。ついでに姉貴もよろしく」
「おい、ついでってなんだついでって」
　う、うわぁ、なつきちをついで扱いできる人って少ないと思うんだけど
「でも、嫌な感じはしないな」
「じゃあきくけど」

「あぁ、姉貴も李衣菜さんも後で」
　悠の方がなつきちよりしっかりしてるんだけど…
「はぁ…我が弟ながら、お袋の血をよく継いでるよ全く…」
「い、いや、なつきちが生活力ないのがダメなんじゃ」
「いや、分かってるんだけどあいつがいるとつい、な」
「へぇー」
「な、なんだよだりー」
「いや、家にいるなつきちって全然ロックじゃないっておもってさ」

「そりゃ、家までかっこいいなんて出来ないからな」
「開き直っちゃダメでしょ…けど、嫌じゃないかな。なんか妙なところでなつきちっぽいし」
「なんだよそれ」
「気にしなくていいよ、それよりなつきち、さっきのシュークリームの話、本当なの？」
そこが信じられない、この前なつきちが持ってきたシュークリームは、お店のシュークリームよりも美味しかったから、高いお店で買ったのかと奈々さんやみくちゃんと話してたばっかりだし
「当たり前だろ？なんで弟のことで見栄を張らなきゃいけないんだよ」
「それはそうだけど、何となく悠があんな美味しい物作れるなんて想像つかないから」
「まぁ、そりゃそうだな、けど本当だ。元々あいつは、この辺にある専門学科のある高校に通ってるしな」
あぁ、聞いたことはある。けど、それだけとは考えられない美味しさだったし
「それに、私が家事とかに興味を全く持たなかったからお袋が直接仕込んだし」
たしか、なつきちのお母さんは元名のあるパティシエなんだっけなるほど…だからかな
「私が家事しなかったしお菓子を毎度のようにお願いして評価してたってのもある」

「そこだよ、なつきち、絶対」
　人間、やったことはやった分だけ上達するし、評価されればそこを直そうと躍起になるから
「そうか？私としてはお袋直伝だからかと思ってたんだが」
「いや、それもあるけど、多分7、8割はなつきちだと思う」
「そんなもんなのか。っと、そろそろ前回の続きやるか」
「あ、うん」

「ふぅ」
「そろそろ休憩にするか、多分後2、3分したら悠がお菓子を持ってくる」
「なんで、分かるの」
　なつきちそんなに人の気配に敏感じゃなかった気がするんだけど
「だってギターの音がならなくなったから練習1回止めたことに気がつくだろ」
「あ、なるほど」
　人の気配とかよりもっと単純なことだったね
「お疲れ様、間食にでも、どうぞ」
　うっ、うっそぉ…こんなの私どころか、かな子ちゃんでも作れるかどうか分からない

よ……
「嘘、すっごい美味しそう…」
「悪いな悠、って、スコーンまでくれるのか」
　な、なんかお店のセットみたい
「え？これも貰っていいの？」
「いいって、余ってたもんだし、待ってな、紅茶も入れてやるから……なんだよ姉貴、要らないなら入れないぞ」
「い、いや、今日は本当に機嫌がいいんだなって思ってさ」
「全く、俺にもそういう気分くらいあるっての、失礼極まりないぞ」
「え？むしろ普段の方が気になるんだけど」
「そりゃもちろん鬼「言わんでよろしい」いてっ。いつもこんな感じだ」
「ぷっ、なつきちと悠って面白いね」
　身内漫才みたいで
「とりあえず、この辺りにして、さぁ、食べてくれ。味には自信ないがって、姉貴はもう食べてるし」
　ほ、本当だ
「美味い、やっぱり悠の作るお菓子は美味しいな。だりーも食べな、美味しいから」

あの食べ物にはうるさいなつきちがこういうんだから
「それじゃあ、いただきます」
とりあえずベリーパイから貰おうかな
「感想は分かってるから聞かなくていいよな、悠」
色合いはすごい綺麗だし、パイ生地も見た目はすごい美味しそう…
「んなわけないだろ、貴重な女性の意見だ。聞くに決まってるだろ」
「美味しい…本当に美味しい」
それしか言えないくらい本当に美味しい、けど、なんか同い年の男の子に負けるのはちょっと悔しいかも

その後もちょくちょく私はなつきちの家にお邪魔しちゃってた。その度に悠が美味しいお菓子と夕飯くれるから申し訳ないとは思ってるんだけどつい
「みたいな感じで最近なつきちの家に行くんだよね～」
「……」
「ねぇ、聞いてる？みくちゃん」
「聞いてるにゃ、それで？夏樹さんの家におじゃまして弟さんや夏樹さんからなんか聞かれたかにゃ？」

「うーんとね。彼氏居るのかとか恋人に興味あるのかとか。よく分からないけど」
なんでなつきちや悠はどうでも良さそうなことを聞いてくるのか
「……はぁ、なんというか、李衣菜ちゃんって、よく鈍感って言われたりしないかにゃ？」
「確かに、よく言われるかな？でもよく分かったねみくちゃん」
「そんなの言わなくても分かるにゃ、そうなると夏樹さんの弟さんは不便だにゃ…」
？なんで悠が可哀想なんだろ？
「……少しは考えた方がいいかもにゃ」
「ん？どうして？」
「まぁ、私からはなにも言わないにゃ」
「う、うん…？」

李衣菜ちゃんは恐ろしく鈍感みたいだにゃ、普通、男の子にそこまでされたりそんなこと聞かれたら分かるもんだにゃ。けどそれに気が付かないってことは多分、学校の男の子達のアプローチも全滅何だろうにゃ～、まぁ夏樹さんの弟なら他の男の人達よりいいとは思うし夏樹さんも半端な覚悟は嫌うから手伝ってるってことはその点も大丈夫だにゃ…だとしたら

「もしもし、夏樹さん？みくだにゃ」

李衣菜ちゃんには幸せになって欲しいし

「あっ、みくちゃん、私そろそろなつきちに呼ばれてるから行ってくるね。お疲れ様」

「分かったにゃ、お疲れ様にゃ」

今日のお菓子と夕飯はなんだろうなぁ、なんでも期待出来るけどね。悠が作った物なら

6話目　誘い文句は勝手に出てくる

あ”あ”あ”緊張する…後数時間で俺は人生で初めて異性をデートに誘うんだ…あ”誘い文句忘れてる…

「助けて姉貴、誘い文句がわからん」

「んなもんチケット渡して一緒に行こうで良いと思うが？」

「そんな簡単に誘えたら苦労はしないんだけどな…」

それに、大切な所でヘタレそうだしなぁ…

「ま、とりあえずマカロンは作ったしがんばって誘うとするか!!」

「そうそう、何事も自信を持ってやること、これが大切だろ？」

「確かに、まぁまだまだいい時間はあるし少し寝て緊張を解すとするわ。多分無いだろうけど李衣菜さんから最寄り駅に付いた時は迎えに行って、うちに上げておいて。人が来たら多分起きるけど」

「ん、分かった、確かに人の気配に敏感なお前が起きないなんてありえないけどな」

「そういうこと。じゃあおやすみ～」

ダメだ…流石に寝みぃ…

「にしても、悠がお客さん呼ぶ時に寝るなんて、よっぽど寝れなかったんだろうな、初心だよなぁ」

そろそろ来るはずなんだけど

「あ、なつきち」

「よっ、仕事終わりに悪いな」

「全然、難しい仕事でも無かったから……あれ？悠は？いつも一緒に来るよね」

「ん？あぁ、今日は寝れなかったみたいだし今は珍しく昼寝中だ」

あの悠が寝れなかったんだ…何作ってたんだろうな、ちょっと気になるかな

「ふーん、珍しいねお客さんが来る時は大体迎えに来る悠が」

「ま、まぁな、多分家着く頃には起きてるから安心しな」

「ん？どういうこと？」

「悠は家族以外の気配に敏感だからな、大体玄関に入る前に起きる」

「えぇ…そんな状態で寝れてるの？」

というかそんな体質じゃとても苦労しそう

「いや、多分寝れてない時の方が多いんじゃないか、ちょこちょこ起きてるみたいだし」

「ダメじゃん…何とかならないの？」

「いやぁ、悠のやつ警戒心が高いから心を許したやつかある程度疲れてないと寝れねぇから」
「大変なんだね。悠も」
　…あれ？家に明かりがついてない？
「だろうな、よく居眠りしちゃうってボヤいてたし……さて、起きてるだろうしさっさと入るか」
「う、うん」
「ただいま～つっても起きてるだろ悠」
「いや、なつきち。部屋の電気消えてる」
「……本当だな…ちょっと来いよだりー、面白いものが見れるかも」
「ん？面白いもの？」
　悠が寝てるだけで何か面白いことでもあるのかな…
「いいか？静かに入るからな？」
「う、うん、分かったけど…」
　……あれ？そう言えば悠の部屋入るのって初めてなんじゃ
「うわぁ…整理整頓されてる…なつきちの部屋とは大違いだね」
「ま、まぁどこに何があるか分かればいいからさ」

「そういうこと言うから汚いんじゃ…あれ？」
　これ、私のＣＤ？
「あぁ、それか、１週間くらい前からこいつの部屋に置いてあってさ。結構聞いてるみたいだな」
「ふーん。でもどうして悠が…」
　普通はなつきちの曲な気がするけど
「……はぁ…」
「ん？どうかしたのなつきち。急にため息なんてついて」
　なんか悩みでもあるのかな
「いや、何でもない。そろそろ悠も起きるだろうし、リビングに行こう」
「そうだねぇ、にしても悠って、寝てると普段とは真逆でかわいいらしいね」
「おいおい、それじゃあ起きてる時はどうなんだよ」
「ん？起きてる時は…かっこいい？」
「お、おう…そうだな」
「やっぱりおかしいよなつきち、そんな惚けて」
「い、いや、気の所為だろ。ほら、行くぞ」
「う、うん」

っと、そうだ
「ちょっと待ってなつきち」
「何してるんだ？だりー」
「ちょっとだけ、お菓子とか料理のお礼に、ＣＤにね」
『いつもありがとう　　これからもよろしく!!』
「じゃあ、行こうか」
「…もしかしたら本当にワンチャンあるかもしれないな」
「なんか言った？」
「いや、何にも。お菓子でも食べようか」

「ふぁぁ…いま何時……１９時!?!」
ちょ、ちょっと待て!?姉貴が李衣菜さんを連れてどこかに行ってるって訳ないよな!?!
「お、起きたか、よく眠れたか？悠」
「お、おはよう悠、お邪魔してるよ」
「あ、いらっしゃい、って!!俺起き損なった!?」
李衣菜さんが来ても寝っぱなしってどんだけ疲れてたんだ俺!?もしくはもう既にそこまで気を許してしまったのか俺!!

「うん、よく寝てたよ？」
「……まじかぁぁぁぁ…」
「おいおい、崩れ落ちる程か？」
　仕方ないだろ、九分九厘俺が気を許してるからだろこれ……ベタ惚れ過ぎるわ
「な、なんかよく分からないけど元気出したら？」
「そ、そうだな…そうする」
　あ、忘れてた、どうやって誘おう
「なぁ、李衣菜さんって、４月の第１日曜空いてるか？」
「ん、ちょっとまってて…うん、空いてるけど」
　しっ!!
「じゃ、じゃあさ、その日の夜ににさ、ロックフェスがあるんだけど、一緒にどう？２枚あるんだけど姉貴が用事で行けないらしくてさ」
「勿論！行く！行く!!」
　手！いきなり掴まれた!!柔らかい!!
「そ、それはよよ良かったよ。じ、じゃあついでに一緒に街を見て回りたいんだけどいいか？」
「うんうん!!」

「じゃあ15時にフェス会場の最寄り駅で」
「分かった!!うっひょー!!1度行ってみたかったんだ!!ありがとうね悠!!」
「あぁ、どういたしまして」
その笑顔だけでも、こっちは幸せなんだけどな

7話　デートで茶々が入るのは当たり前

不味い…流石にまずい
「1時間前に着いてしまった…やることが無いぞこれ…」
いや確かに姉貴に早すぎって止められたけどさ、男が誘っといて遅刻ってどうよ。カッコつかないって絶対
「…けど李衣菜さんとデート…ふふっ…最高…生きてて良かったぁ」
この幸運を噛み締めておかないとな
「いつか李衣菜って呼び捨てに出来るといいなぁ。まだそこまで親しくないって言うか心の準備が…」
李衣菜さんとしては全然大丈夫らしいけどそんなことしようものなら俺が死ぬ、今ですら悠と呼び捨てにされるだけで尊死するってのに
「先は長い、なぁ」
「何が長いの悠」
「俺のれんあ…!?李衣菜さん!?!?」
早くね!??!後45分はあるぜ!?しかもめっちゃ私服センスいい!?!

「あはは、緊張しちゃってさ。早く来たつもりだったんだけどそれより早いんだもん、びっくりしたよ。ごめん悠、待った？」
「ぜ、全然!!むしろついさっき来たばっかりでどうやって待つか考えてたところだ」
「そっか、ならさ、一緒にここら辺回ろうよ、ちょっと予定より早いけどその分回れるし」
　んっ!!
「喜んで、一緒に回ろうか」
　手くらい繋いでも……バチは当たらないよな？
「そしたら早く行こ!!時間は有限なんだから!!」
「あっ李衣菜さん！待って!!」
　ってまてまてまで俺の口!?何言ってる!?なんで呼び止めた!?さては本能で生きてるな貴様っ!!
「ん？どうしたの？」
　ええい、ままよ!!
「い、いやさ、人が多いしはぐれたらめんどくさいし、手を繋いでいかねぇか？」
　…今絶対顔真っ赤だ俺。絶対そうだ
「なんだ、そんなこと？いいよ、ほらっ」
　李衣菜さんの手って柔らかいしずっと握ってたくなるって違う!?
?!?!!?!?

「それじゃあ改めて行くよ!!」

　んっ、意外と悠の手って柔らかい。しっかりとした手をしてる。でもこの手でいつもなつきちや私のお菓子や料理を作ってくれてると思うとかわいらしいかな

「悠はどこ行きたい？」

「うーん。とりあえずそこの本屋でも見てみよう」

「分かった。ところで悠って本屋で何見るの？」

「異性の興味の引き方とか料理の本とか、漫画もちょっとかな」

「最初だけなんて言ったか聞こえなかったけど、まぁやっぱり悠らしいね」

　悠って本当にわかりやすいよね。趣味とか行動とか

「あ、そう言えばさ、俺の部屋のＣＤにサインしてくれただろ」

「そ、そうだね」

　い、要らなかったかな？

「ありがとうな、すっごい嬉しかった」

　…なんかかわいい。こんな顔始めて見た

「本当？ならサインした側としても報われるね。どういたしまして」

「さて。付いたみたいだな。勝手に見て回ってもいいけど。せっかくだし一緒に回ろうぜ」
「うん、じゃあ、悠の見たいものを見せてもらおうかな」
「つまらないかもしれないとだけ先に断っておくよ」
「私としては日頃悠から沢山お菓子とか貰ってるし、これを機にどんなプレゼントがいいか見れるからちょうどいいよ」
「あはは、お礼なんて要らないぜ？沢山李衣菜からは貰ってるしな」
　私、悠に何をしてたんだろ…？ってあれ？
「いま、李衣菜って呼んだでしょ!!」
「あっ…わ、悪ぃ」
「ようやく、さん付け止めてくれたんだ。妙に距離を置こうとするんだもん」
「そ、そうかな、気の所為じゃねぇか？あはははは…」
　…誤魔化すのは下手くそみたい
「まぁいいや、これからはさん付け禁止、いいね？悠」
「……はい」
「返事が不安だけど…改めてよろしくね？」
「…よろしく、李衣菜」

「うん!!」

でも、不思議、悠といると心から楽しくなる。これもロック？

不味いついさっき間違えて李衣菜って呼び捨てにしたらこれからずっとという命令をいただいたんだけど。難易度ルナティックとかエクストラハードとかそんなレベルなんだけど

「…？」

ぁぁぁぁぁ!!!無理!!死ぬ!!近い!!

「にしても意外だね。悠がこういう小説見るんだ」

……？あ”、いつも行く恋愛小説ゾーンじゃねぇか

「ま、まぁな。少し読み始めたんだ。面白いし、勉強になる」

「へぇ…ちなみに勉強って、誰か好きな人でも居るの？」

貴女です!!貴女しかいません!!というか今すぐ結婚してください!!

……なんて言えるわけもないし

「ま、まぁ、秘密だけどな」

「っ、そうなんだ。本当に教えてくれないの？」

やけに食い下がるな…

「…まぁ、ヒントだけなら」
「本当!!」
「ほ、本屋だから静かにな?」
「そ、そうだった…で、ヒントは?」
「…俺とよく居て。よく一緒にご飯やお菓子を食べる人」
……ってこれ答えじゃん!!悩むまでも無いじゃん!!
「……まさかなつきち!?兄妹の恋愛はダメだよ悠!?」
……そっちかァ…
「……はぁ…」
「違う?そしたら…」
「いや、次に行こう、多分すぐ分かるとは思うけど」
むしろどうして気が付かないのか不思議だ…

…悠の好きな人…誰だろう…何となくムカムカするし少し悲しいし。さっきまですっごい楽しかったのに…私ってこんなに惚れやすかったかなぁ…
「うーん…なつきちが違うなら…誰だろ」
よく悠と一緒に居て、ご飯やお菓子を一緒に食べてる人…なつきち以外…分からない

や

「でもまぁ、悠が幸せならいいのかな」

「ん？なんか言ったか？」

「んーん、何でもない」

だから、そう思えばこの痛みも治まるはず、もし、悠が上手くいったらちゃんと祝わなきゃ

なんか李衣菜が少し怖い気がする。何故だ…どこでやらかした木村悠!!

「り、李衣菜？」

「なに？」

「なんか、怒ってません？」

「別に？」

絶対怒ってるって!!

「ほ、ほら、CDショップあるし。寄ってこうぜ」

「まぁ、いいけど」

「ちょっと見たいのあるから待っててくれ」

…とりあえず今のうちに考えよう…なぜ突然李衣菜が不機嫌になった？思い当たる節がないぞ

「おかしい…明らかに何も間違えたことはしてないはずだ…」

とりあえずこれから話して何とか…あ”？

「なぁなぁ嬢ちゃん、俺達と遊ばない？」

「ちょっとだけでいいからさ～」

「な、なんですか」

喧嘩とか得意じゃないからそれだけは避けたいな

「ね？君一人でしょ？」

「俺達と遊ばうぜ、な？」

悠が離れてからすぐに知らない男の人たちが話しかけてきたけど、これってあれだよね、ナンパだっけ

「結構です。私、今日デートで来てるので」

これで何とかならないかな…悠にはちょっと申し訳ないけど

「いいじゃん、君みたいなかわいい娘を1人にするような彼氏なんてさ放っておいて」

「そうそう。そんな男より俺達と一緒に行こうよ」

「しつこい「俺の惚れた女になんか用ですかね」悠!?」
あっ、悠、来てくれるんだ……やっぱり優しいね
「男に用はねぇんだよ。痛い思いしたくなかったらさっさと彼女置いてどっか行け」
「ほら、行くぞ李衣菜走るから手を」
「え?あ、うん」
…悠の手、安心する。暖かい
「ちょ、ちょっと待てよ!!」
い、以外に足速い、結構グイグイ引っ張られてる
「待てって言われて誰が待つんだよ…あ、警備員さーん!!」
「げっ」
ふぅ、良かった…
「どうかしましたか?」
「いや、さっき彼女が今逃げてる男達に結構強引なナンパをされまして」
「なるほど、彼らは常習犯なので手を焼いてるんですよ。っと、では」
「…ふぅ、あー、疲れた。大丈夫か?李衣菜」
「うん、ありがとね、悠。助かった」
…そう言えば悠ってなんでこんなに私の事気にかけてくれてるんだろ

「ほら、行こうぜ李衣菜、ライブが始まるぜ」
「う、うん…」
「ほら、手繋ぐぞ、逸れるし」
　それになんでこんなに胸が熱くてしかたないんだろう

　何事も無くライブ会場に着いてしまった…いや、あった方が困るんだけどな
「あ、李衣菜、これ」
「なに、これ」
「チケット。これと本人確認できる何かを持ってないと入れねぇから」
「ふーん、にしてもどうして本人確認が必要なの？」
「そりゃ、転売防止だろうな。この手のチケットは高く売れるだろうし」
　まぁ俺にはちっともわかんねぇけどな。転売する必要を感じないし
「転売かぁ、全然ロックじゃないね、それ」
「まぁ、気持ちのいいものではないな」
　むしろそれで手に入れたものに意味はなさそうなんだがなぁ
「あ、そろそろ入れそうだよ」
「おう、じゃあ楽しもうぜ、李衣菜」

「うん!!」

「すっごい楽しかったな!!どのユニットもすっげぇ音楽でさ、一人一人の【ロック】ってのが少しだけ分かった気がするぜ!!」
　激しいものが多かったけど激し過ぎるみたいなものはなかったし、楽しいな、ライブ、来年も行こうかな
「うん!!やっぱりライブはこうじゃなきゃね！今日のユニットの人達も私たち観客も一緒にロックになれた気がしたよ!!また来ようね、悠！」
　……ホント、鈍感はズルい
「あぁ、今度は俺のオススメのアーティストのライブ連れていくからな」
「ホント!?楽しみにしてるね!!」
　こんな気持ち、初めてだ

８話　風邪を引いて看病されるのは当たり前

「いやぁ、いい春休みだったよ～、みくちゃん」
「ホントにゃ？そりゃ良かったにゃ」
　ライブも楽しかったし悠の作ったお菓子や料理を沢山食べられたし、ギターの練習も沢山出来たし
「にしても李衣菜チャン春休みあけてからやけにイキイキしてるにゃ」
「え？そうかな？」
「そうだにゃ、もしかして、彼氏でも出来た？」
「そんなわけないよ、大体、私が好きな物好きなんてそうそう居ないって」
　皆きっと私のこと友達と思ってるだろうし
「そうかにゃ～？でも好きな人は出来たんじゃにゃい？」
「それこそないよ、私は今は恋愛に気を向けてる余裕はないしさ」
「ホントかにゃ～？ならＬＩＮＥでいっつも話してた夏樹さんの弟は？」
「悠？なんでよ」
　悠は親友みたいだし

「なら、少し想像するにゃ、もし悠ってやつが知らない女と手を繋いでたらどう思う?」
…悠が知らない女の人と手を……なんかムッとする
「ちょっとムッてなるけど…」
「…なんにゃ、結構李衣菜チャンもわかりやすいよ。じゃあさらにもう一歩にゃ、もしキスしてたらどうかにゃ?」
…胸が痛いし苦しい、悠(友達)が幸せならそれでいいはず…
「……何ともないよ」
「何言ってるにゃ、李衣菜チャン、顔に出てるからにゃ。まぁこれでわかったにゃ?李衣菜チャンにとって、夏樹さんの弟がどんなに大きな存在なのか」
「…私は悠が…好きなんだね。それも結構前から」
でも、でも、そしたら悠は…私の事、どう思ってるんだろ
「なら、少しは行動に移すにゃ、じゃなきゃ、誰かに取られると思うにゃ。聞いた話だと結構モテるらしいし」
「え!?」
悠ってそんなにモテるの?私聞いたこと無いんだけど…悠もそんな素振りも見せなかったし
「夏樹さんから口止めされてたからにゃ、本人が言うには面白そうだからだそうにゃ」

「な、なつきち…」
　流石にちょっと酷いと思うんだけど
「けど、実際動かないと不味いんじゃにゃい？」
　わ、分かってるよ、けど
「け、けど、デートとかするにしたってどこがいいか…」
「そうだにゃ～、ここことかいいと思うよ？」
「ここって、水族館？」
「そうそう、この前ここの社員さん達や私たちにもだけどペア割引券配ってたにゃ、それとこの辺なら江ノ島とかもあるからいいデートスポットになるにゃ」
「へぇ～、でも、そんなのいつ配ってたの？私貰ってないんだけど」
「李衣菜チャンはその日夏樹さんの家に行ってたから貰えてないにゃ、だから私のあげるにゃ」
　やった、これで少しチャンスが…あれ？
「でも、悪いよ、みくちゃんだって行きたい人くらい居るでしょ？」
「ユニットメンバーの恋路は応援するもんにゃ、だから気にせず行ってくるにゃ」
　みくちゃん…今最高にロックだよ
「ありがとう！頑張るね！」

「そうするにゃ、早いところ誘ってくるといいにゃ」
「じゃあ、またね!!」
今日悠って家に居るのかな?直接の方がいいよね

「……これでいいかにゃ?夏樹さん」
「あぁ、助かったよみく、私から渡しても良かったけど、それじゃあ悠に勘づかれそうだからさ」
全く、人の恋路に首を突っ込めば馬に蹴られるって言うけど、これは背中を押してあげてるだけだからセーフだよね?
「まぁ、いいにゃ、これであの鈍感李衣菜チャンも動き出したから」
李衣菜チャン、ファイトだにゃ!!
「って、なんで夏樹さんがここに居るにゃ?」
「あぁ、午後から収録があるからな」
「ふーん、にしてはなんか微妙な時間だにゃ」
「まぁな、悠が風邪引いてたからなれない、看病してたらこんな時間さ」
弟さんが風邪引いたのかにゃ…

「…待つにゃ、それは不味いんと思うだけどにゃ」
「私もギリギリまで居ようと思ったら悠に追い出されてさ。あいつの事だから無茶してそうな気がするんだよな」
「収録は休めないからにゃ…けどさすがにそこまで分かってるならにゃにか手はうってあるでしょ？」
　でも流石に休んでそうだけど…
「手って言うよりはこうなることを予期してな、だりーが行ったから安心できるがな。悠も休めるし、少しは世話されるのも悪くないだろうしな」
　…李衣菜チャン、ホントに、ファイトだにゃ!!

「ゲホッゲホッ…あ～だるい…」
　まぁだるくても最低限家事やらないとこの先が辛いし…とりあえずなんとか姉貴の飯は作ったし、あとは…布団は…無理、洗濯物回すか…
「えっと…これを入れて…あれ…？」
　まずい…体はフラフラするし頭はクラクラする…もう…だめ
「悠？居る？」

おかしいな…インターホン押しても出ないし、でも電気は色んなところでつきっぱなしだし…
「あれ？鍵が空いてる……入るよ～」
……おかしいな、勝手に来た時は悠は何か小言を言ってくるのに
「悠？どこにいるの？」
キッチンにも居ないし…どこだろ…洗面所とか？
「あっ、居た!!悠、そんな所で寝てたら風邪引くよ…」
反応ないし…なんか息荒いよね…まさか!?
「ちょっとごめんね!!あっつ!?すごい熱じゃん!!何やってるの！寝てなきゃ!!」
「…ごほっ、姉貴……？なんで行ってないのさ…俺は大丈夫だからさ」
私となつきちを間違えるって…致命的じゃん
「そんなふうには見えないよ。ほら、手伝うから、ベットに入ろう」
「悪い…」
「いいから、ほら、行くよ」
うっ、意外と悠の身体ってがっしりしてる…やっぱり男の人なんだなぁ
「って、何考えてるんだ私」
今は悠の看病しなきゃだめでしょ

「…あれ…そう言えば姉貴…背、縮んだ……？」
「いいから、寝てなって、あとは任せてさ」
「……うん…お願い」
なつきちに家事を頼むなんて、本当に辛いんだ…
「よしっ!!頑張るよ」
悠程じゃないけど多少はできるはずっ

うーん、少しはマシになったかな…何故か仕事に行ったはずの姉貴が居たけど
「あぁ…よく寝た……サンキュー　あね……き？」
……なんで李衣菜さんが俺の部屋で布団敷いて寝てるの……？おかしくね…姉貴がいたはず…
「いやまさか…李衣菜さんと姉貴を間違えたなんてそんなバナナ事ない…」
だとしたら…もし、だとしたらまずい…死ねる
「…よし、寝るか」
二度寝は全てを解決する

そのあと全部夢じゃない事を知って悶えたのは残当

９話　幸せは日常に

拝啓親父、お袋へ
今いかがお過ごしでしょうか、きっと2人で微笑ましく過ごしているのでしょう。私は今
「…さて、悠?」
好きな女の子を怒らせて正座させられています。とても心苦しいです
「は、はい、なんでしょうか」
「私が言いたいこと、分かるよね?」
…姉貴より余裕で怖いぞこれ
「…はい」
「けど、改めて言わせてもらうけど、３９．４度の熱で家事をしようとしない」
「…はい」
「そんな無茶すれば倒れるの、悠なら分かってるよね」
「……はい」
「…すっごい心配したんだから。バカ」

「……ごめんなさい」
本当に論外だな…好きな女の子に心配かけた挙句世話されちまうなんて
「…よしっ!!この話はもうおしまい!!まだ病み上がりなんだから悠はゆっくりしててね。また倒れるのは全然ロックじゃないよ!!」
手馴れた様子で家の料理器具とか出したりしまったりしてるんだけどどこで覚えたんだ…ってあれ?昼は食ったし…
「なにしてるんだ?」
しかもなんか鼻歌までうたってるんだけど…可愛い
「何って、夕食の用意だよ?なつきちもまだだし、悠も動けないんだから」
へぇ…夕食の準備……ん?
「あぁ、なるほど、夕食の準備したら帰るのか、送ろうか?」
「何言ってるの、泊まるよ?なつきち、明日はレッスンだし。私は今日明日、お休み取ってるし」
…へ?泊まる…?李衣菜がうちに……?
「いやいやいや、そこまでしなくてもいいって。せっかくの休みをそんなことに使わない方が」
「それこそ無いから。私がやりたくてやってる事なの。だから今日明日は安心して休ん

か

で」

…こりゃ俺がいくら食い下がっても折れねぇな…

「…それじゃあ、お願いできるか？李衣菜」

「うん、任せて」

…でも、こういうのも、悪くないかもって思う俺がいるのもやっぱり惚れた弱みなの

「えっと、とりあえずお粥だよね、あそこまで熱があると食べれるかわからないけど、食べさせないと」

相変わらず整理整頓してあるキッチン、わかりやすくて助かるよ

「醤油か、塩か、悠はどっちが好きなんだろ」

…とりあえず、醤油にしようかな。私がそっちの方が好きだし

「悠も好きなら、いいなぁ」

同じ物が好きだと、嬉しいかな

「うーん、他に入れるものは…特にないよね！」

あとは麦茶と一緒に持っていけばいいかな？

「悠？調子は？お粥作ったけど食べれる？」
…んぁ、寝てたか
「あぁ。食欲はあるみたいだし、いただく事にするよ」
「分かった、じゃあ口開けて？」
「…え？」
今なんと仰った…？
「え？だって口開けないと食べさせられないでしょ？」
「い、いや、自分で食える、から」
李衣菜に食べさせてもらうのは理性が持たない、絶対に
「なら、食べきるまで見るから、ちょっとでも危なそうなら、すぐ私が食べさせるからね」
「ん、分かった」
その後、意地で食い切った、色々危なかったけど
「３７．９度…まだまだ高いけど、やれなくもないか」
立てる、歩ける、思考もしっかりしてる。行けるな

「さてっと、李衣菜はどこまでやっちまったかな」
　とりあえず夕飯はまだだろうし、手伝おうかな
「李衣菜、どこまで終わっ…た…」
　洗濯物も干してあって夕飯もほとんど準備出来てる!?
「あれ、悠、もう動けるの？」
「ま、まぁ、なんとかな、それより李衣菜が全部やってくれたのか？これ」
「うん、ちょっと場所が分からなくて手間取ったけど、悠が整理していたおかげで大体分かったから、何とかなったよ」
　姉貴のために書いておいた何があるか書いた紙が役に立ったのか
「そっか、なら、よかった、姉貴は遅れるだろうし、先に食べよう」
「ん、分かった、うどんだからきっと食べられるとおもうよ？」
　ほんと、有難いな…
「ありがとう、助かる」
「この位、当然だよ」

　本当に、幸せだな、李衣菜と過ごしてるだけで…